いかに実践するか
～いつくしみの特別聖年②～

第二百六十六代ローマ教皇フランシスコが公布された「いつくしみの特別聖年」。その解説書ともいうべき「イエス・キリスト、父のいつくしみのみ顔」という四十六ページからなるパンフレット＝写真＝を何回も読む。

前回「聖年・ヨベルの年」について書いたので、今回は中世から今日まで続いている「聖年」について触れる。初代教皇聖ペトロから数えて第百九十三代の教皇、ボニファティウス八世（在位・一二九四～一三〇三年）が一三〇〇年を「聖年」と公布したのが始まりである。

教皇は全ヨーロッパの聖職者にローマ巡礼を呼びかけ、応じた者は死後、天国に行けると確約した。このためローマ巡礼者が大幅に増え、ローマ教会の財政は潤ったという。一四〇〇年以降は二十五年に一度を聖年とし、ローマ巡礼者には免償の恵みが与えられた。

免償はカトリック独自の教義である。「罪と罰」、人間が罪を犯した場合、告解の秘跡により神から罪は許される。しかし罪に伴う罰は残る。中世からの聖年は、その罰がローマ巡礼の恵みによって免除されるというものだ。

旧約時代は五十年に一度の聖年の恵みによって社会的弱者が救われたが、中世以降の聖年は巨大になったカトリック教会の特権と権威による内向き、打算的なものを感じる。

産業革命以降の近代、現代社会は飛躍的な科学・文明の発展で人々の価値観も大きく変化する。豊かな物質社会で人間関係は希薄になり、利己主義が目立つ。

国家、宗教、地域、人種などにより経済格差が拡大し、武力による紛争が今各地に発生している。人間による自然環境破壊で地球は病み、自然災害が目立つ。今、人類は大きな曲がり角に直面している。

今回、ローマ教皇フランシスコが通常の聖年ではなく「いつくしみの特別聖年」を公布したのは、これらに対処する道を今までのカトリック教会の枠を超えて示されたのだと思う。

この時期に公布されたのは、カトリック教会が一九六二年から一九六五年まで四会期に分けて開かれた第二バチカン公会議で、長い間、中世の教会を踏襲したものを大幅に刷新し、現代社会に適応する教会へ脱皮してちょうど五十年の節目の年だったからである。

この公会議での最大のテーマは教会の現代化。他宗教、他教派との対話である。その点から考えると「いつくしみの特別聖年」の持つ意味を教会用語ではなく一般の人々にわかり易い言葉で提起した方が良かったと思う。

新年に大勢の人が各地の神社に参拝した。誰の心にも聖なる目に見えないものへの畏敬の念を持っていると思う。その聖なるいつくしみの心で一人々々が無関心を克服し、主義主張を超えてすべての隣人、周囲の人と交わることから始まるのではないだろうか。

「そんな抽象的なことか」と言われるかもしれない。しかし武力や権力ではなく、聖なる方のいつくしみの心、愛する、慈悲の、大切にする、賛美する、感謝する、かわいがる、恵みの、歓喜の、平和の心をもって日々の生活の中で相手と交わることがスタートであり、終わりではないだろうか。

自分の出来るいつくしみの心を実践することから始めよう。生活の中から小さな小さないつくしみの心運動を始めようと思う。

特別聖年公布の大勅書